

第1回 NITS 大賞（平成29年度）エントリーシート

新潟大学教育学部附属新潟中学校

C-7

【活動名】 附属新潟中式「確かな学びを促す3つの重点」を基にした授業改革のための職員研修

解決すべき課題： どんな問題を解決しましたか？

教科等横断的な視点から生徒の資質・能力を育成する授業を構想・検討できない問題

当校では、育成すべき資質・能力として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力等」という3つの柱を設定し、生徒が自らの学びを価値付け、資質・能力の高まりを実感できることを目指しています。育成すべき資質・能力を前提とし、教科・領域等で職員研修を進めてきました。しかしながら、明確な目的を設定しても、その方法を職員で共有できませんでした。そのため、指導案検討を実施しても、どのような視点を基に資質・能力を育成すればよいのかという方法（手だて）を深く検討することができませんでした。

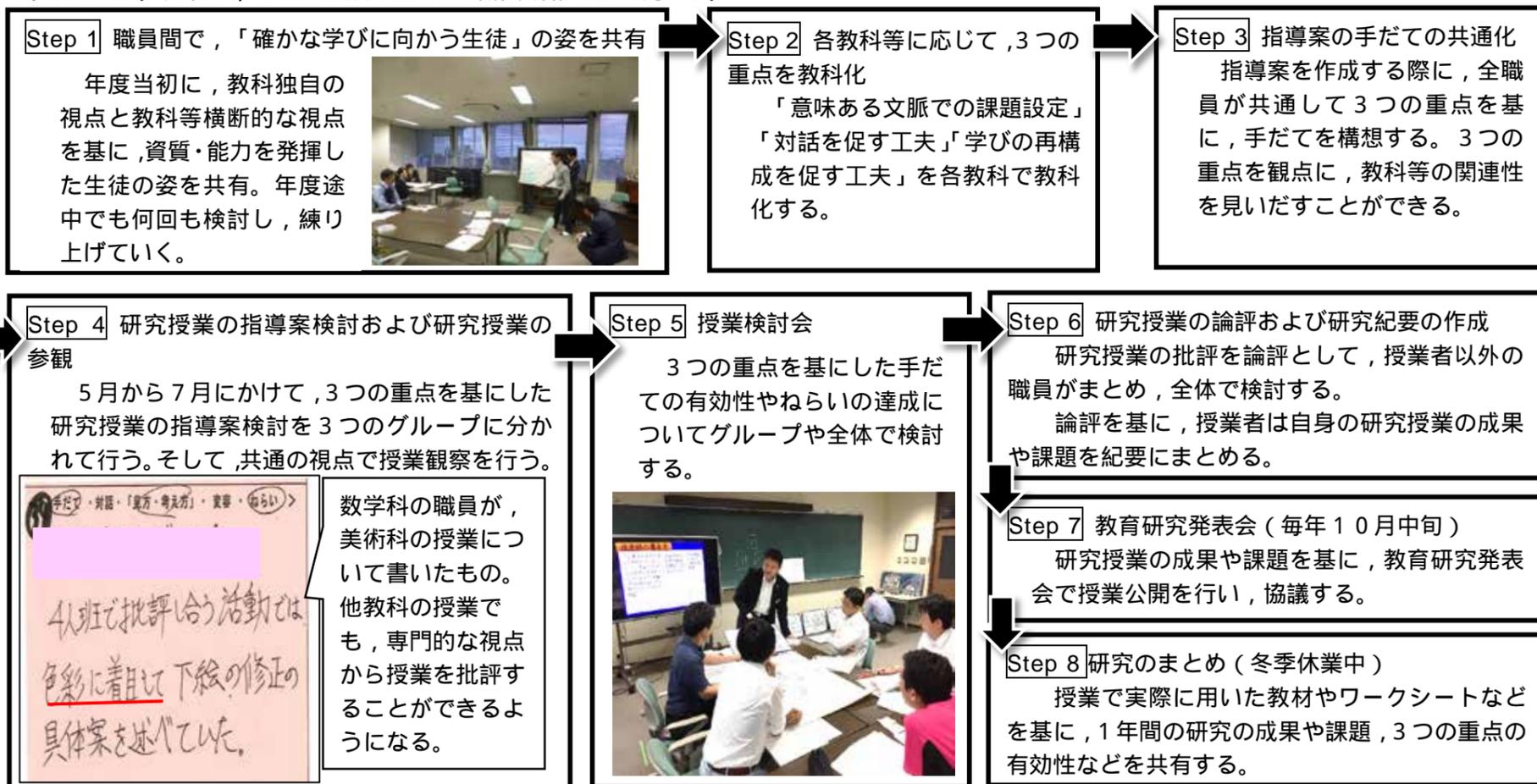
目的や背景： 解決すべき課題の背景や、活動の目的をおしえてください

上記の課題を挙げる背景には、教科独自の視点と教科等横断的な視点の両面から資質・能力を育成していく必要性が明らかになったからです。これまで、当校では、教科独自の視点から、教科ごとに育成すべき資質・能力を設定し、授業を構想してきました。教科独自の学びの文脈、学習内容、学習活動等、教科の特性に応じた学びを豊かにすることを重視してきました。そして、教科ごとで学びを振り返らせ、価値付けさせる活動を組織した際に、生徒が教科等横断的に学びを振り返っていることがわかりました。例えば、ある生徒は、英語と特別活動のつながりから協調的な考え方の大切さを見いだしました。「英語のディスカッションで学んだ相手の賛同・理解していることを表すことは、特別活動の体育祭の活動で学んだ相手の立場に立って、相手の気持ちを汲み取りながら話すことと同じだ」というように、教科横断的に自らの学びをつなげています。このような生徒の実態を基に、生徒は教科独自に有用とらえた知識、考え方、他者とのかかわり方などを、教科等横断的に生徒自身が納得のいくものにすることができ、どんな場面でも汎用的に発揮できる資質・能力を身に付けていくという研究仮説を設定しました。

活動内容： 何をしましたか？

附属新潟中式「確かな学びを促す3つの重点」を基にした授業改革のための職員研修の実施

教科等横断的な視点から、職員が授業を構想したり、検討したりできるように、「意味ある文脈での課題設定」「対話を促す工夫」「学びの再構成を促す工夫」を「確かな学びを促す3つの重点」として設定しました。生徒の資質・能力を育成することを前提に、職員が同じ視点から授業を構想し、検討できるようにしました。以下は、3つの重点を基にした職員研修の進め方です。



活動の成果： それによって、どんな成果が得られましたか？

3つの重点を基にした職員研修によって、教師間で教科等横断的な視点からの指導案検討及び授業観察が可能になりました。また、職員一人一人が他の教科の取組や内容を理解することによって、お互いの工夫や努力を認め合う職員の同僚性や協調性を確かなものにできました。例として、音楽科の教諭は、「他教科である英語や理科の視点を取り入れることで、新たな視点からグループ活動を考え直すことができるようになりました。さらに、生徒目線から指摘をもらうことで、事前に生徒のつまづきや困り感を踏まえた指導構想ができるようになりました。」と研修方法のよさを実感しています。

アピールポイント（アイデア）： もっとも、がんばったこと、注目したことをアピールしてください。

当校のこれまでの研修の成果をまとめ、教育書を発刊することができました。本のタイトルは、「附属新潟中式『3つの重点』を生かした確かな学びを促す授業 教科独自の眼鏡を育むことが『主体的・対話的で深い学び』の鍵となる！」です。本書では、京都大学大学院准教授石井英真氏、東洋大学教授後藤顕一氏によるこれからの教育に求める提言、附属新潟中学校の授業改善の考え方（「確かな学びを促す3つの重点」）、全教科領域の授業実践記録、カリキュラム・マネジメントなど、あらゆる面から新学習指導要領に対応した要素をまとめることができました。